

東光寺だより

いのちの バトンリレー

看取り士 柴田久美子さんを迎えて

司会 今日は、大変お忙しく活動されています「看取り士」柴田久美子先生のお話を聞く機会をえましました。先生は1952年、島根県出雲市にお生まれと聞いております。色々職業を経験された後、老人ホームの寮母、特養の介護士などで現在は自分の名刺に「看取り士」と明記し、死の尊さを一人でも多くの人に伝えたいと2002年NPO法人{なごみの里}、2012年には「日本看取り士会」を設立、その会長を務めておられます。

住職 先生が人の臨終の瞬間の大切さ、看取りの大切さをお感じになったのは、どういうきっかけでした。



柴田先生 私は早くに父を亡くしました。息を引き取った父の手を握りしめ、冷たくなっていくのをこの手で感じました。この時、最期に寄り添い看取りというものの大切さを感じました。

住職 介護と看取りとは、随分ちがうんですね。

柴田先生 旅立つ方のそばに最期の瞬間まで寄り添い、その人の「死」に立ち会い、旅立ちを見送るのが看取り士の役目なのです。

住職 付き添い、最期を迎えられるときどんなことを思い、感じておられるのですか。

柴田先生 「死」というと「怖いもの」「忌み嫌うもの」というイメージが強いかもしれませんが、私にとって、いやだれにとっても「死」は怖いものでも忌み嫌うものでも、ましてや敗北でもありません。実際の看取りの現場は慈愛にあふれて、逝く人にとっても看取る人にとっても言葉にすることができないほど、大きな喜びや、感動があるのです。人間は生まれるとき、

多くの人に祝福され、感動を与えます。そのひとの最期の瞬間も、周りの人になにか感動とかなにかを残していくことができるのです。

瀬戸内寂聴さんは、「人は人生の最期を迎える時、巨大なエネルギーを生む」といわれたそうです。そのエネルギーを生きている人たちに与えながら旅立っていくのです。いのちのバトンを次の人に渡すというのは、それほどすごいイベントなのです。

住職 いのちのバトンリレーですね。

柴田先生 大切な人の死は、悲しくつらいものです。しかし、きちんと看取り、「魂」のリレーができた時、人はその死を悲しくつらい思い出として振り返るのではなく、その人の「魂」が自分の中に宿っているように感じることができます。

日本はすでに4人に1人が65才以上の高齢者という超高齢社会を迎えており、「多死社会」に突入しています。だれでも必ず死を迎えるからこそ、死の意味をプラスに捉える価値観が必要になってきます。

住職 先生は看取りという世界で「最期の呼吸を腕の中で」ということを大切にされているとうかがいました。実際に、“抱いて送る”ということを実践されているのですか。

柴田先生 はい、できる限りそうしています。腕の中にぬくもりのある重みを感じながら、家族や愛する人たちが、旅立つ人のいのちの重みと“いのちのバトン”を受け継いだということをしみじみ実感するので。その場の空気が変わり、その場にいる人たちが清められていく……そういう不思議な感覚を何度も経験しています。旅立つ人の積み重ねてきた「魂」というエネルギーが、死という過程を通して、のこされる人に渡される。それが、“いのちのバトンリレー”なのです。残念ながら今日ではそうした、いのちのバトンがうまく受け継がれていないような気がいたします。だからこそ、実践を重ねて造り上げた、プラスの生死観「看取り学」を一人でも多くの人に伝えることが大切だと思っています。私はすべての人が最期を迎えるとき「愛されている」と感じて旅立てる社会を創ること。この夢を現実のものにするためつとめます。「すべての尊い命、やさしく、やさしく、やさしく」と唱えながら実践していきます。

司会者 今日は本当にいいお話をありがとうございました。

文責 東光寺 住職 鷺見邦隆